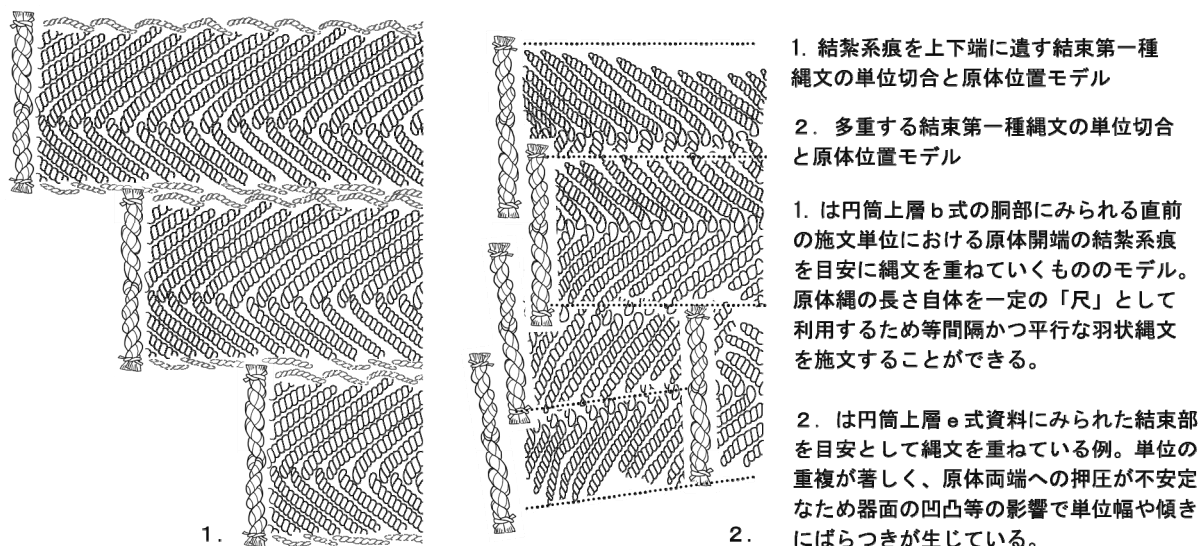


第IV-3図 村前ノ沢遺跡・茂辺地 4 遺跡出土の円筒上層式土器編年



第IV-5図 円筒上層b式・e式における結束第一種原体による縄文（地文）施文過程の復元

その多くで施文単位の上下端に原体開端を結紮した系の痕が綾絡文状に遺る。結紮系は0段縄が殆どであるが一部1段縄が混じる。注目すべきは、この結紮系痕は上下両端いずれも遺っており、隣接する上位・あるいは下位の施文単位における結紮系痕をなぞるように重複、あるいは近接平行して確認される例が極めて多くみられることである。この特徴的な遺存状況から、地文縄文の施文技法について推定し施文単位の切り合いと係る原体の位置について図上復元したものが第IV-5図-1である。加えて、同じ結束第一種原体を用いる円筒上層式後半の地文縄文について、比較対象として同様に施文単位等について図上復元したものが同図2である。

これをみると、結紮系痕は偶々器面上に遺った類のものではなく、等間隔に整然と羽状縄文を連続して施文するための、当該期の縄文土器製作における統一的な技法のひとつであった可能性が考えられる。この技法の特徴は、各要素の統一性がくずれ別要素への置換・省略が進む円筒上層c式において徐々にみられなくなり、円筒上層d式以降の個体では（偶々結紮系痕が器面に遺るものはあるが）全くみられなくなる（あるいは、これらの時期に増加する結束第二種原体による地文施文や地文原体とは別の結節原体により付与される綾絡文は結紮系痕を模したものであるかもしれないが、単なる装飾要素としての付与であり円筒上層b式以前のそれとは文脈を異にするものである）。

ここでは地文縄文についての例を挙げたが、円筒上層d式以降についてはこのほかにも土器製作に係る諸要素について、円筒上層c式以前の規格的な様相と比して良くいえば多様な、悪く言えば統一性の無い展開を見せる。「円筒上層c式」という群についても（あくまで本遺跡資料においては、の但しをつけるが）、明確に画期される段階として捉えるには若干の疑義が残った。同式指標とされる刺突文列（概して「半截(栽)竹管文」と呼称される報告例を多く見かけるが、少なくとも本遺跡出土例では断面角型の棒状工具によるものか串状工具による。同種の角型刺突を称して「半截竹管文」としている報告も少なからずあり、適切ではないように思われる）を施す個体は圧倒的に少数であり、施文構成も刺突文以外の要素でほぼ円筒上層b式と変わらないもの・平行撚糸文の省略など簡略化や粗雑化が進むが幅広の隆帯など文様構成の諸要素において円筒上層b式を大きく逸脱しないもの・円筒上層d式に近い幅細の隆帯に刺突列が沿うものと様々であり、刺突文以外で一箇の群としての共通性を画期するのはやや難しい状況であった。言うなれば、円筒上層b式以前という統一的・規格的な様相をみせる群と円筒上層d式以降の雑多な多様性を見せる群との端境、遷移段階と捉えるのが本遺跡における「円筒上層c式」の位置付けとしては妥当なように思われる。

円筒上層式末期まで見られる肋骨状・連弧状モチーフの系譜についてはおそらくは上層 a 式までその系統を遡りうるものであるが、こうした連綿性とは別に「土器」あるいは「土器づくり」に求められる社会的な価値・位置というものについて、円筒上層 b 式以前と d 式以降については大きな差異を認めうるのではないかと、というのが本遺跡における円筒上層式を総覧した上での所感である。これが地域集団における社会構成自体の変容によるものであるか、さらに円筒土器文化総体に通じるものであるか極地集団的なものであるかは、他遺跡の資料も交え、土器以外に係る要素も含めたより詳細な検討が必要である。今後の課題としたい。（時田）

b. 縄文時代後期初頭の土器群について

第Ⅳ－6 図は本遺跡出土資料ならびに茂辺地 4 遺跡出土の縄文時代後期初頭に相当する土器群について分類し、その編年を試みたものである。大筋は既刊である茂辺地 4 遺跡発掘調査報告書総括において行った分類に沿うが、一部新規資料の発見に伴い改訂を加えている。系統としてはおおまかにふたつに分けられる。主体をなすのは大安在 B・ノダップⅡ・煉瓦台式といった中期後半～末葉の北海道在地系土器群の系譜にある天祐寺式の古段階・新段階およびその後続群の相当するⅣ群 A 類 1 種である。もう一方は、東北地方で展開する大木式の最末期である大木 10 式ならびにその後続型式（大木系）に相当するⅣ群 A 類 2 種である。

Ⅳ群 A 類 1 種に関しては、茂辺地 4 遺跡報告においては、主に籬状隆帯の貼付を伴う群について分類を行い、天祐寺式古手にあたる群（Ⅳ群 A 類 1 種 a）から新手（Ⅳ群 A 類 1 種 b）、さらに後続する型式（Ⅳ群 A 類 1 種 c：茂辺地 4 遺跡報告時のⅣ群 A 類 3 種が相当）と至る過程で、籬状文様帯の器体全面から口縁部への収斂・無文帯の作出→無文帯の消失・籬状文様帯の単純化→籬状要素そのものの消失、という連続した遷移を辿るものと推定した。本遺跡ではこれに加え、茂辺地 4 遺跡では寡少であった籬状に縄線文を巡らす群（以下「籬状縄線文群」と仮称する）についても一定数の資料が得られたため、これも含め考察を実施することが可能であった。その結果、籬状縄線文群についても、天祐寺式新式→後続と同じく、口縁部に籬状文ではさんだ無文帯を作出する群と、区画無文帯をもたず口縁端部に文様が収斂する群が確認でき、器形・施文構成等についても共通性が確認できたことから、同様の遷移状況にあるものと推定した。ただし、天祐寺式古手（Ⅳ群 A 類 1 種 a）に相当する「無文帯を持たず、口縁端部～底部にかけて籬状縄線文が数条めぐる」個体については確認できず、必ずしも天祐寺式と全く同根とは言い難い状況にある。籬状縄線文群のうち無文帯を有する群（14～18）は、突起を有する口縁や底部から大きく広がりながら立ち上がる等、器形的特徴もより大木系に近似している。地文の施文方向等についても斜位回転による横走・縦走と天祐寺系とはやや趣を異としており（無文帯をもたない同系の群については天祐寺系と同様、原体縦回転による斜行縄文が主体である）、沈線を縄線文に置換するなどして、Ⅳ群 A 類 1 種 b 段階において発生した在地系の製作技法による大木系の模倣群である可能性が考えられる。同様の器形的特徴をもつ個体は、以降のⅣ群 A 類 1 種 c における各段階でも確認できる（41・42・46・47）。

次に、天祐寺式系（Ⅳ群 A 類 1 種）と大木系土器群（Ⅳ群 A 類 2 種）の相関についての本遺跡ならびに茂辺地 4 遺跡資料を総覧しての所感を述べる。Ⅳ群 A 類 2 種にあたる大木 10 式ならびに後続型式の土器群のうち口縁部に無文帯を有する群において特徴的な文様のひとつに、口縁突起下に垂下する C 字あるいは J 字状を呈する隆帯の貼付がある。本遺跡ならびに茂辺地 4 遺跡出土の同群においても同様の隆帯を有する個体はいくつか散見され、モチーフとしては C 字状（23・25）のほか「人」字状に貼付される例（21・22）がみられる。興味深いのは、口縁部無文帯＋「人」字状モチーフの隆帯という組み合わせを有する個体が、Ⅳ群 A 類 1 種 b の個体においても見られる（11）ほか、Ⅳ群 A 類 1 種にみられる幅広の隆帯と大木系の文様構成を兼備する両群の在地系折衷型式と推定される個体（19・20）においても確認されていることである。なお、籬状縄線文群においても、